



ようこそ！ 市長室へ

33



人生の成熟期に生きがいを楽しむ

子育てを終え、定年を迎え、改めて、その後の人生がまだまだ長いことに気がつきます。まだ、3分の1を残す、これからの人生の成熟期をどう過ごすのか。

そんな中、やがては自分もお世話になるかもしれない高齢者の生活支援に、元氣なうちに参加して、高齢になっても安心して、住み慣れた地域で暮らし続けられる、そんなまちづくりの一翼を担ってくれる方が増えています。

公的な制度として民生委員・児童委員制度がありますが、それを補うのが「地域福祉協力者」です。現在、市内10地区で150人ほどの方に、身近な人ならではのきめ細やかな見守りや、民生児童委員や自治会と連携しながらの活動

をしていただいています。今後も拡充が必要であり、多くの皆さんの参加を期待しています。

地域の実情に合わせた自主的な活動の代表例としては、高齢者の通院や買い物などの移動支援があります。高台にある団地でも好評で、行政の支援も求められて



地域福祉協力者はこの協力者証を持って活動しています



このステッカーが協力事業所の目印です

いますが、タクシー会社などの民業圧迫との兼ね合いから、法律の規制が厳しく、規制緩和を求めているところですが、

買い物を自宅に届ける配達サービス、ごみ出しや除草などを代行する家事支援、高齢者サロンの運営など、さまざまなボランティア活動が始まっています。そのような取り組みを応援するため、市では、昨年7月から活動経費の一部を助成する「地域支え合い活動助成制度」を開始しました。ぜひ、ご活用ください。また、試行中の「Kマナー」も、その効果を確認したうえで、今後本格稼働に移行するかどうか検討します。

昨年1月からは、市内外の事業所などと協定を結び、業務の際に気づいた異変を市に連絡していただく「可児市地域見守り協力活動」を始めました。新聞販売店、金融機関、農協、水道・電気・ガス会社など55の事業所と市民団体1団体が協力してくれています。

高齢者支援の取り組みは、生きがいづくりや自分の将来に備えるためばかりではありません。ふるさとを魅力的なまちとして、価値ある資産として、次代に引き継いでいくという大切な意義があり、楽しみがあります。地域の皆さんの活動が盛んになり、医療や介護など専門家のサービスと連携した「可児市版地域包括ケアシステム（Kケアシステム）」が構築され、「住みごこち一番・可児」へとつながっていきます。

可児市長 高橋 賢二

※1月1日号の記載に誤りがありましたので、お詫ひして訂正します。

正 土田の白鬚神社 副 土田の白鬚神社